

シアチウ物語 上



中国の児童文学・9

ホアン クー リウ

黄谷柳・作 さねとうけいしゅう・しまだまさお・訳



太平出版社

933	*アソ	アソ
	黄	谷 柳 作 (さねとう けいしゅう・しまだ まさお 訳) シアチウ物語 上 中国の児童文学 9 太 平 出 版 社 1975 330P 22cm

さねとう けいしゅう 1896 年広島県に生れ、1926 年早稲田大学文学部卒業。
 聖徳学園短期大学教授。おもな著書に『日本語の純潔のために』『中国人
 日本留学史』など

しまだ まさお 1912 年鳥取県に生れ、1929 年鳥取県立第一中学校(旧制)卒業。
 日中友好協会正統中央本部理事。おもな著書に『中国新文学入門』、訳書
 に『沸きたつ群山』(共訳)など

シアチウ物語 上

母と子の図書室 4 年生～中学生-6

1975 年 4 月 20 日 第 1 刷発行

¥ 1500

著 者 黄 谷 柳
 訳 者 さねとう けいしゅう
 し ま だ ま さ お
 発 行 者 崔 容 徳

発行所 東京都千代田区西神田1-2-15 石合ビル

株式会社 太 平 出 版 社 ©

TEL291-9744・9752 294-7083 振替東京99563

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

道野装版・加藤印刷

シアチウ物語^上

中国の児童文学・9

ホアン クーリウ
黄 谷柳・作

さねとうけいしゅう・しまだまざお・訳

古川益三・絵



おとなりの国——中国には、

はじめから浮浪児^{ふうろうじ}はいなかったのでしょうか？

いいえ、いっぱいいました。

シアチウたちが、その生き証人です。

ワニザメなど、悪いやつがたくさんいて、

中国の子どもも、おとなも、いじめられていました。

どうして、悪いやつらをやっつけて

新しい中国ができたか——

シアチウのお話をききましょう。



第一部 春の風 秋の雨 11

1 おちぶれ 11

2 「馬」になつて 16

3 海 へ 20

4 折れた翼 25

5 今夜はどこに? 30

6 ワニザメの家 33

7 体を張る賭博 38

8 初 恋 44

9 七面鳥 トシメン 屯門に遊ぶ 53

10 身は香港、心は祖国 57

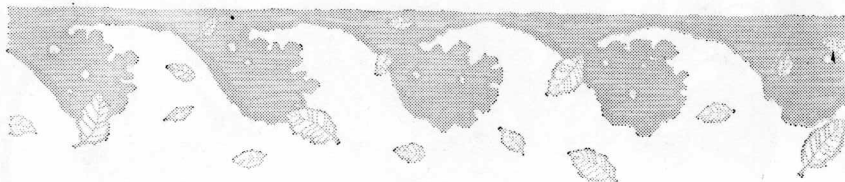
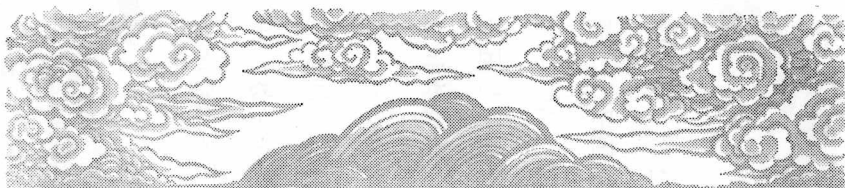
11 群雄の宴 62

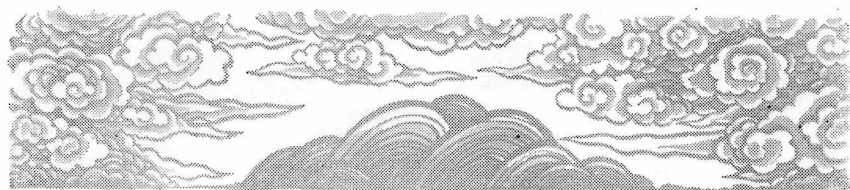
12 贈物は一つ、心は二つ 66

13 初陣の功 70

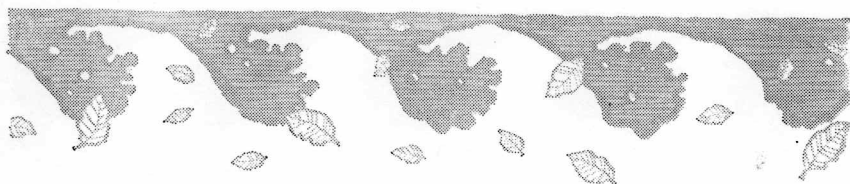
14 追風に帆 79

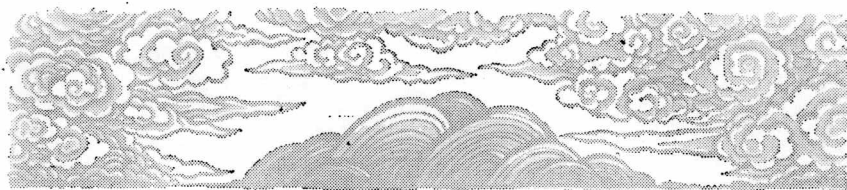
15 別れ別れにわらじばき 86



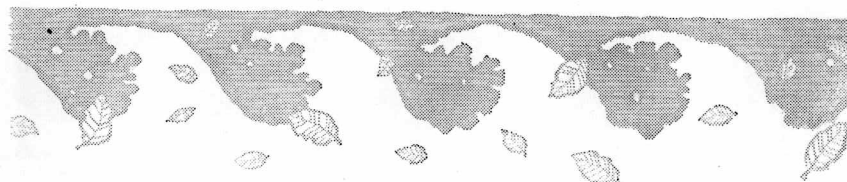


16	苦難の友は慰める	90
17	この世の「天国」	95
18	道ばたでの離れわざ	99
19	獅子山 イッ をこえて	103
第二部 白い雲珠 たま の海		
1	古いきずなと新しいきずな	113
2	黄埔上陸 ホアンブー	124
3	手相をみる	136
4	恋がたきの鉢合せ はちあわせ	148
5	いつわりの誓い	154
6	怪老人	165
7	長い道	171
8	大鵬湾 タイガン の突発事件	183
9	軍艦で広東 コアン へ	189
10	ワニザメ軍服を着る	192
11	星は知らない	197
12	赤ズボンの少女	201
13	一日一善	207





14	子牛との別れ……………	213
15	糸のもつれ……………	219
16	三人組……………	228
17	沙 ^{シヤ} 溪 ^キ へ……………	234
18	命を賭ける……………	240
19	珠江 ^{しゅうきう} の流れ……………	252
20	愛情と友情の酒……………	266
21	風に乗り波について……………	282
22	かけあがる雲……………	297
23	狂い泣く海……………	308
	「冒険者の楽園」は消えた——あとがきに代えて……………	317



シアチウ物語 下 もくじ

第三部 山は長く水は遠し…………… 317

1 死者と生者……………	317
2 魂を質にいられた人……………	328
3 はて、どうしよう……………	342
4 もとのもくあみ……………	353
5 通 い 船……………	365
6 生き観音の説教……………	377
7 鉄の部隊……………	386
8 やぶれた夢……………	395
9 じぶんで選んだ道……………	402
10 浮浪児の家……………	415
11 もときた道へ……………	429
12 めずらしい贈物……………	441
13 この衛生部員……………	450
14 第一課、しらみをとること……………	463
15 戦勝祝いの夜会……………	475

16 沙水の血けむり……………	483
17 名射撃手……………	499
18 一つの難題……………	504
19 後方病院……………	513
20 人と薬と服装と……………	531
21 問題の人物……………	538
22 虎の口ひげ……………	549
23 海洋のような陸地……………	581
24 戦闘の喜び……………	591

シアチウ物語上

中国の児童文学 9

ホアン 黄 谷 柳 作

さねとうけいしゅう 訳
しまだまさお

ふる かわ ます ぞう 絵
古 川 益 三



母と子の図書室

第一部 春の風 秋の雨

1 おちぶれ



波止場ちかくに店を開いて、しがないパン売り渡世とせをしていた蝦球シゲキウにも、このごろ手ごわい商売がたきがあらわれて、かれが仕入れたジャムパン、バターパン、クリームパンはさっぱり売れなくなってしまった。肉そばの屋台がかれのお客をさらってしまったのだ。そば屋の店では、米粉のそばは一〇銭せんで食え、二〇銭、三〇銭、四〇銭と出せば、肉そばや牛もつ、そばがあった。しかし、それもつかのま、やがてお粥屋かゆやの屋台が肉そば屋にとってかわった。白粥は五銭から、揚げパン、ふくらしパン、揚げ棒、牛の舌はどれでも五銭、肉うどん、カステラ菓子、揚げ餛飩うどんも一〇銭からあって、労働者たちは、一〇銭あれば、けつこう朝飯を

すませることができた。シアチウは、こうした商売がたきに押され、押されて、ついにおちぶれの憂うれき目をみることとなったのだ。

しかし、かれは、そのことをおッ母アには知られたくなかったので、なんとかパンを売ってしまおうと、おさない頭に思いうかぶあらゆる方法をやってみた。かれは、むかしのおとくいの姿を見かけると、たのんでみた。また、顔なじみの労働者を見つけると、頭をさげてたのんだ。

「おじさんよお、やっぱりせんみたいにパンをたべとくれよ。でないと、おいらも、おッ母アも干あがつちゃうんだよ。」

しかし、顔なじみといっても、こうして泣きおとしにかけられると、いやな顔を見せ、きまつてこう答えた。

「売れなきゃ、じぶんで食やいいじゃねえかよ。まぬけだな、おめえは。」

しかたなく、しまいには、文ぶんなしの連中までつかまえては、なんとか売りつけようとした。

「なら、掛け売りにしときな。給料出たとき払うからな。」相手の難題に、シアチウは、ちょっと考えこんだが、や

がて心をきめて、こういった。

「よし、男の約束、まちげえあるめえな。」

.....

こうして商売は、やつとのことと息を吹きかえし、パンは一つ残らず売れるようになった。しかし、困ったことに、家に帰って、おッ母アに勘定を渡すことができなかった。かれは、でたための話をこねあげて、おッ母アをだました。——商売なかまのおッ母アが病氣になったので、売上げを貸してやった……銭は来週中には返してくれるはずだ、と。そうして、あくる日も、そのまたあくる日も新しいそをつくりあげては、勘定を渡せぬいいわけにしなければならず、うそはますます出まかせになっていった。しかし、三日目には、とうとうそのうそもばれてしまった。彼女は、かれをむちゃくちゃにひっぱたいたが、かれは齒をくいしばって、がまんした。

おッ母アがぶつときには、むかしから妙なくせがあつて、いつも、最初は氣ちがいのようになって、ひどくぶつが、ぶつてもぶつても抵抗ひとつせずに黙りこくってつつ立っている息子の強情に、だんだん根負けはする、手はしびれ

るで、しまいには、棒切れを投げすてると、じぶんが泣きだすのであつた。さすがのシアチウも、おッ母アにこんなふうに泣かれるのが、なによりも苦手であつたが、しかし、それよりもっとやりきれなかつたのは、彼女から泣きごとをきかされることであつた。——一六年まえ、シアチウがまだお腹のなかにいたころ、サンフランシスコへ人夫に売られていった親父のこと、……一〇年まえ、「二人息子（ふたご）は一人出せ」とのお達しで、兵隊にとられていった上の息子のこと、……その息子に、一か八かの大ばくちで元も子もすっからかになくされて、いっそ身投げしようと思つた彼女自身の身の上ばなし……こうした泣きごとをきいてみると、シアチウは、たまらなくなつてしまうのだ。しかし、かれにもまた、妙にえこじなところがあつて、手足はまめに動かすかわりに口がおもく、どんなにくやしいことがあつても、絶対にいいひらきをしようとしなかつた。

こうした気性は、おッ母アの方でもよく承知しているで、そのあくる日の朝はやく、そうと息子のうしろをつけていき、かれの行動を逐一見張つていた。そして、息子の商売がなかなか繁盛（はんじやう）しているのを目のあたりに見た。二〇

人ちかい労働者たちが、たちまちかれをとりまいてパンを
ほおぼり、工場のサイレンがまだ鳴らないうちに、全部売
りきれてしまったのである。そこで、たべおわった労働者
たちが、一人、二人と、尻のほこりを払いながらいつてし
まうのを見ますと、彼女は、にこにこしながら、シアチ
ウのそばによってきた。

「シアチウや、銭を出してお見せ。」

シアチウは両手をひらいて見せ、こまったような顔をし
ながら、いった。

「おッ母ア、銭はないよ。きょうは四日だろ。やつこさん
たち、一五日に給料もらってから勘定するんだよ。」

おッ母アは、これをきくと、目をむきだして怒り、もの
もいわず、いきなりかれの頬ほげたに平手打ちをくわすなり
えり首をむずとつかんで、家の方へ引きずっていった。

しかし、シアチウは、おッ母アに引きずられながら一〇
歩ばかり歩くと、とつぜん立ちどまった。そして、一瞬、
悲しげなまなざしでおッ母アをながめたとおもうと、右手
で彼女の手をふりほどき、くるっと身をひるがえして、い
まきた道をかけた。驚いてわめき叫ぶおッ母アの声が、

追っかけてきた。しかし、それも、だんだん遠のいていっ
た――。

一六歳のシアチウは、こうして、その日から独立独歩の
生活をはじめることとなった――。

いま大通りをかけぬけていく、かれの目の前には、未知
の世界がひらけていた。そして、この世界は、五色ごしきに彩ら
れ、ただ紛然ぶんぜん雑然ざぜんとしているばかりで、はじめて見るかれ
は、さてこれからどうしたものかと、いささか、とまどい
を感じていた。

――しばらく、夢中で走っていたが、やがてのことに、
漆チシムツ威イ通ツりの、とある芝生しばふに腰をおろすと、ひと休みしなが
ら考かんえた。……そうだ、晩ばんになったらこの石だたみの上に
寝てやろう。そうすれば宿賃しゆくちんはいらない、……飯の方はな
んとかなるだろう。このおいらが、飢え死になんかするも
んか！……かれは、おッ母アのことも考かんえたが、やはり、
彼女が飢え死にするとは思われなかった。それどころか、
じぶんが家出したために、食いぶちが一人分へったのだか
ら、おッ母アはそれだけ助かるにちがいないと思った。そ

して、そう思うと、なんだか目の先が明るくなった気がして、すつくと立ちあがると、尖沙咀の方へ、すたすた歩いていった。

尖沙咀の九龍波止場には、いま、大きな外国汽船が一隻、岸壁に着いたところであった。波止場の鉄柵のそとは、出迎えの人たちで、ごったがえしていた。シアチウも、この人ごみのなかに入っていた。船の甲板には、何十人かの華僑が立っていて、なかには、望遠鏡で出迎えの群集をのぞいているものもあった。出迎えの人たちのなかには、大きな白紙にお碗のような大きな字で名前を書いて、頭の上でふっているものが、すくなくなかった。船上の人は、じぶんの名を見つけると、おどりがあって喜び、ひっきりなしにハンカチや帽子をふって、陸の知人たちと合図しあっていた。シアチウはそれらの光景を見て、考えともなく考えた。――もし、あの乗客のなかに、おいらのお父ッつあんがいたとしたら、どうしておいらを見つけるだろう？ おいらも、どうしてお父ッつあんを見つけたらいいだろう？ ……かれは、つりこまれるように、人波をかきわけかきわけ、岸壁まで出ていき、波に浮ぶさまざまの

船を、ぼんやりとながめた。すると、かれの目に、つぎのような光景がうつった。汽船のどてっ腹に、いく隻もの小舟がこぎよって、船頭たちが、めいめい、先に籠をつけた長い竿をさしあげては、船上の人からおあしを入れてもらっているのだ。――それを見たシアチウの頭に、ああすれば、おあしを手に入れるのも、なんでもないじゃないかという考えが浮んだ。

と、一隻の小舟が、かれの足もとにこぎより、岸壁に横づけになるや、一人の男がとびあがってきた。

「野良犬の王さん！」

それを見たシアチウは、思わず大声で叫んだ。

呼ばれた男は、とがった顎をあげ、こい眉毛の下に三角目玉をぎよろつかせていたが、人群中に立ちまざっているシアチウの姿を認めると、声をかけた。

「おめえか。おめえ、まだパンを売っとるのか？」

「あんたが場銭取りにこねえから、おいら、商売やめちゃったよ。」

シアチウは、冗談口をたたいた。

野良犬のワンは、そういうシアチウにじろりと一瞥をく

れたが、なにを思いついたか、つかつかと歩みより、かれの耳に口をよせ、

「おれについてきな！」

ときさやいた。

シアチウは、かれのあとにしたがって、人ごみを抜け、バスの停留所のうしろまでついていった。野良犬のワンは、そこで立ちどまり、シアチウの顔にひたと目を止めながら、問いただした。

「てめえ、だれの手についてきやがったんだ？ え？ だ

れの馬だ？」

「おいら、一人できたんだよ。」

ワンは、またしても問いつめた。

「てめえ、だれの馬なんだよ？」

「馬ってなんのことなんだよ？ おいら、さっぱりわかんないよ。」

それをきくと、野良犬のワンは笑いだした。

「てめえ、とうしろだな。……てめえ、一人でかせげるなんて思ったら大まちげえだ。世のなかなんてものゝ、そんなあめえもんじゃねえんだぞ。いいか。わかったら、てめ

え、おれの馬になるんだ！」

そして、シアチウに、金をいくらか持つてるかときいた。三六円でも、三円六〇銭でも、あるいは三銭六厘さんせんりゅうでもいいという。そこでシアチウはポケットをひっくりかえして、三銭六厘とりだし、野良犬のワンに問うた。

「これでいいかね？」

野良犬のワンは、それを受けとると、声音こゑもいかめしくこういった。

「いいか、いまからのちは、てめえは、おれの身内のものだ。飯にありつきやともに食らい、難儀なんぎにあえばともにあたる。心変りをしやがると、白いドスをおみまい申し、どてっ腹に風穴かざあながあくぞ！ いいか、男に二言あるめえな。」

シアチウは、どう答えていいのか、わからなかった。野良犬のワンは、ポケットから五円札をとりだすと、それをシアチウの手ににぎらせた。

「これで飯でも食いな。そして、一二時きっかり、さっきの波止場はしとところで待つてな！ おれたちゃ今夜、海釣りに出かけっからな。」

いいおわると、ワンは、人ごみにまぎれて、いってしま